

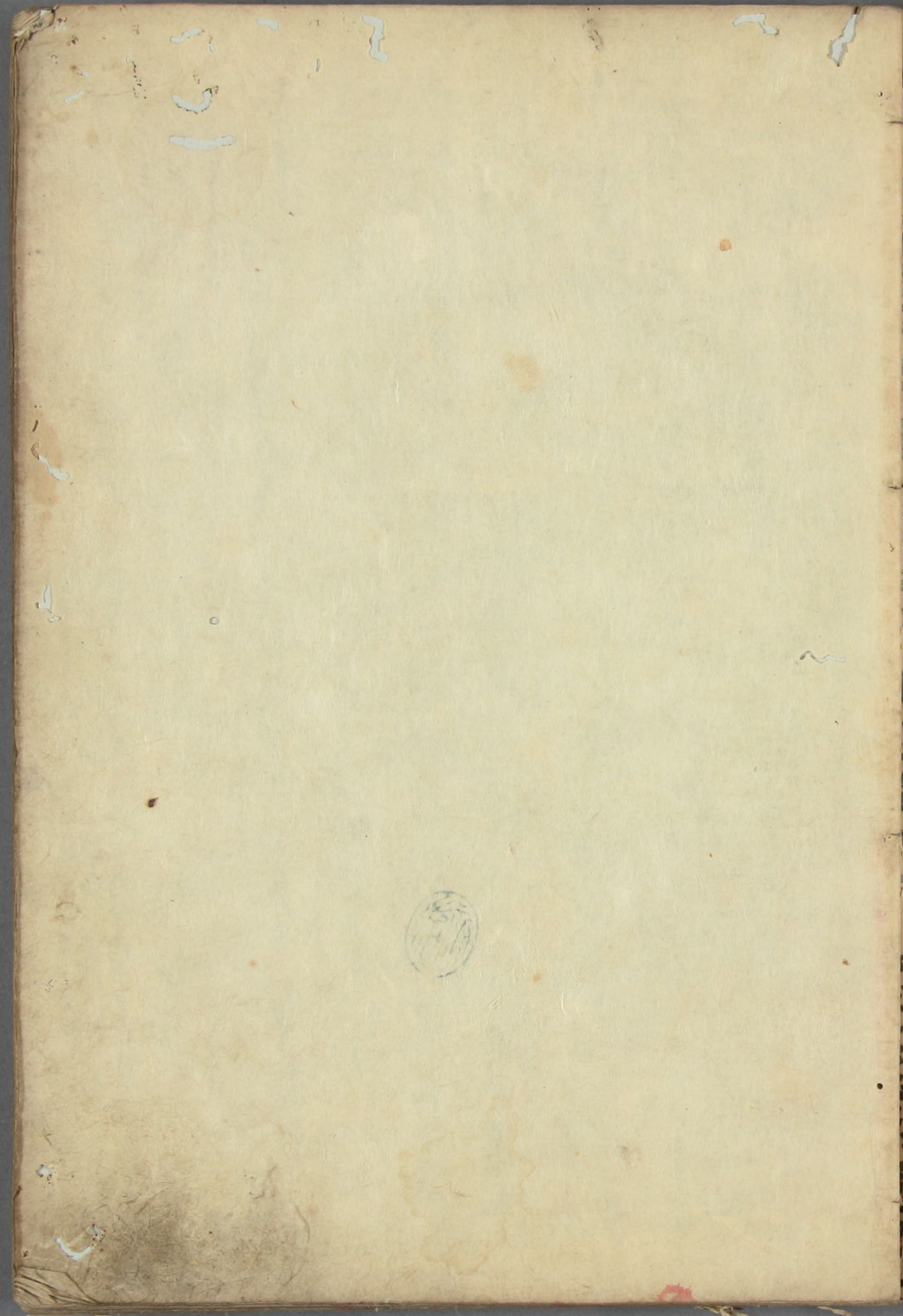


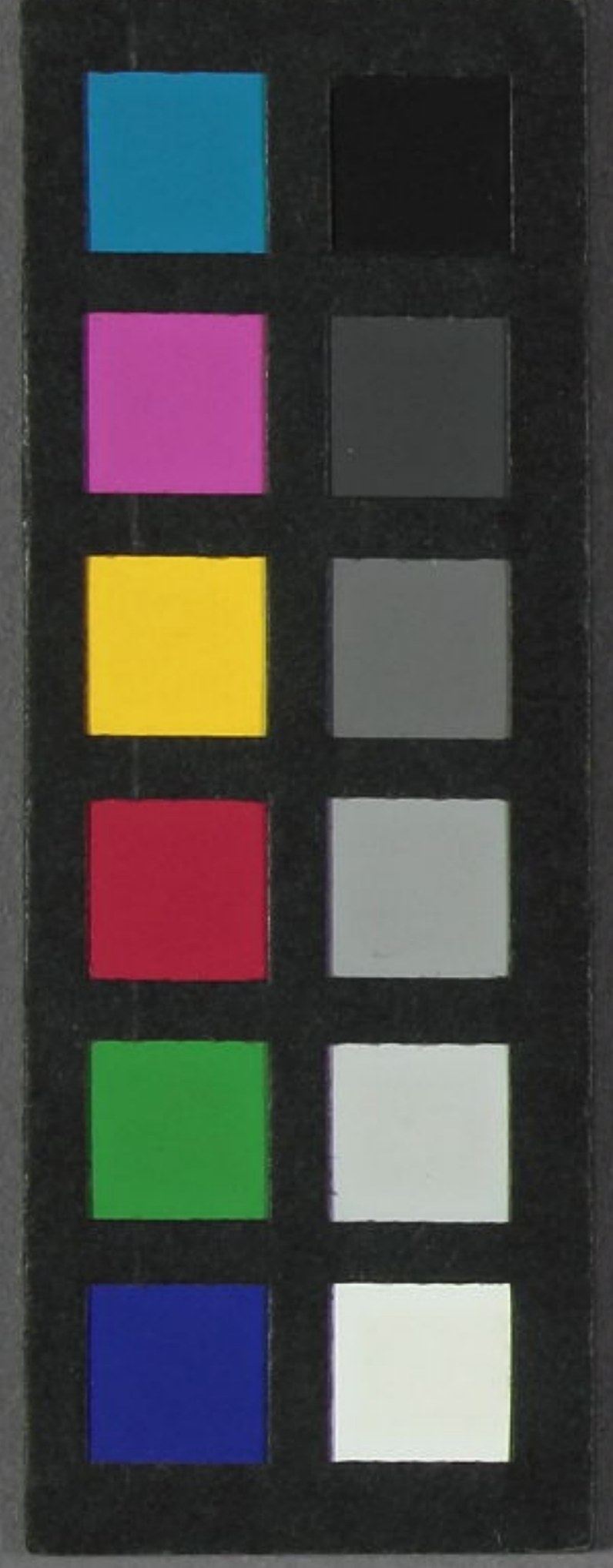
後拾遺和歌集 全

後拾遺和歌集

特別
イ 4
3163
10





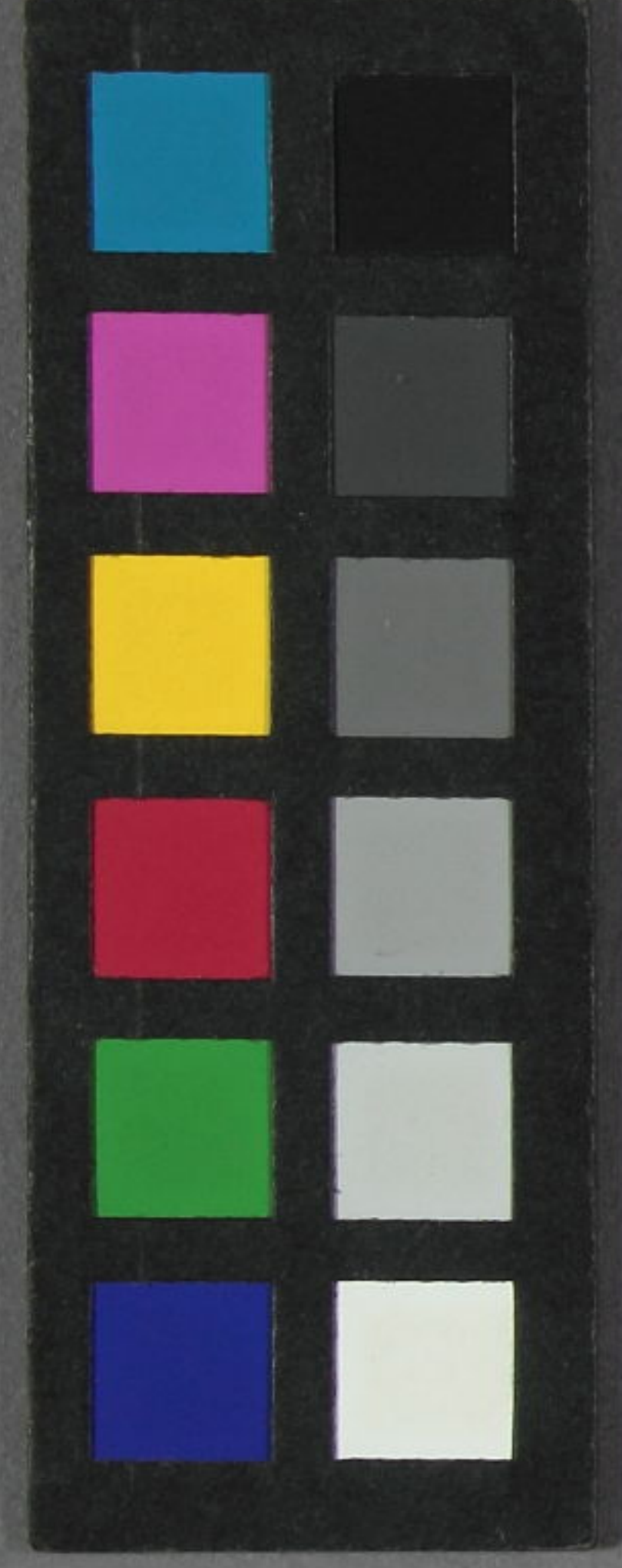


二條関白昭實公

後拾遺和歌集全
春上
少祐下

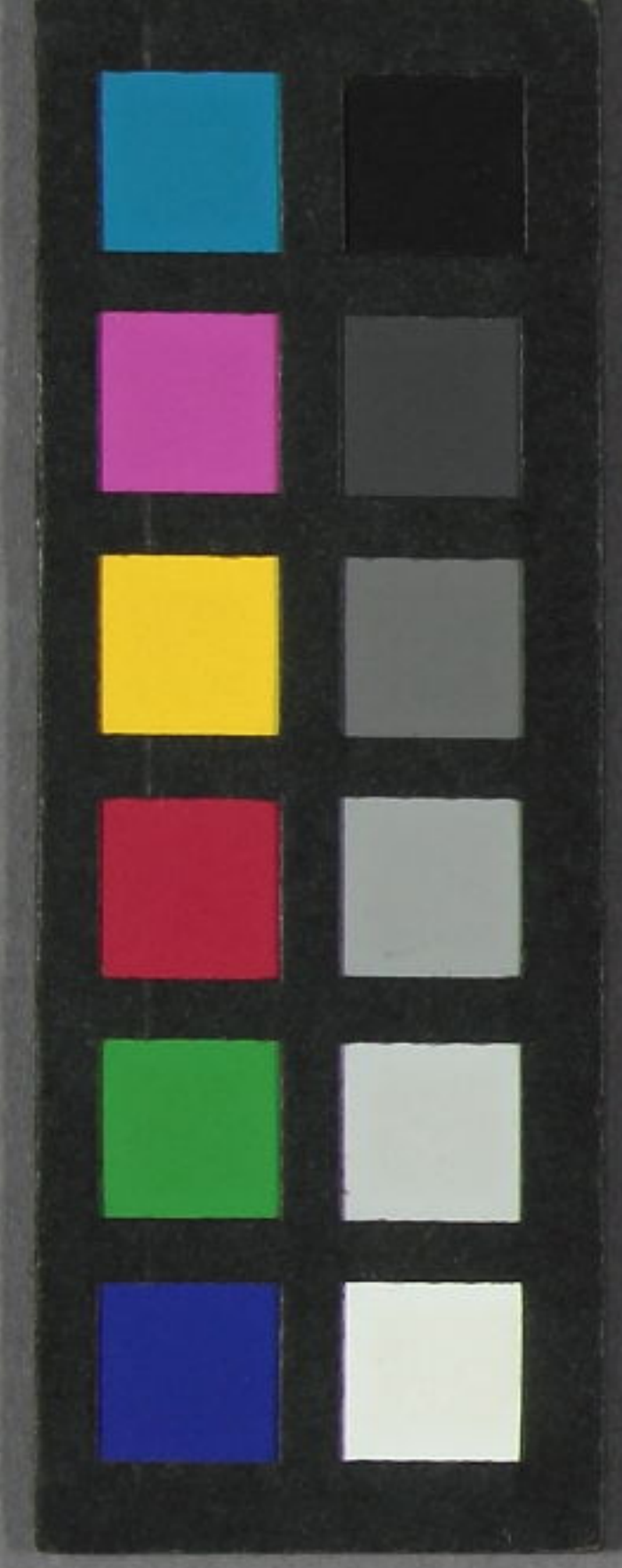
正藏





四半代衣本
 巾着あがり
 戊子
 神田定武





極札
長松堂
書



後拾遺和歌抄序

和學講談所

わらゑあめりあさこあろりてまらころこさる
のうこあみろくあまえとあろりはのくにあつあ物
あゆら事あかあかろりそ日のうらりころろり川の
あわわとあかろりなるあま那のまろり月あれあ
こはまあまふろそまてむあかまろりあまこま
おろりまあまこまろりてあろりまあまこまあま
人月あまこまろり風あまこまの事あまこまあま
あまあまこま馬あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまのあまろりあまあまあまあまあま



とらえたるこの年か事かんふさつうのあ
すこす梅の月りつふふらふさきの花かあひ
めつちういりららとよあまりりりどど
らひくさまねとせりあつそは指造り家集
といふかかそな今は撰えらるの集こさ
りりらららこのつこのあうさうあうくも
かこくそあめはわあううさささ事
とらえあわさこのりらら昔あ一つか
いつのそらひくあならさうらありのあつ
ゆり中長徳堂清象之揮源順純時文

海と望城おえりきたよのちとえそと
竹のうにけ木のつひうらえらひとあり
あふのう方あときたとしてこのあつ
このあつらららまであふはさうと
といれららあふらう事とああ
君か事と年とすあうちうさうら
あつあつこちとあうあつあつ
あつあつあつと後ららあつあつ
あつあつあつとあつあつあつあつ
集とえらうらけ事かまらあつあつ

後拾遺和歌集卷第一

春上

正月一日らみまふりける

小大君

いふ袖てあつらふ約より事そきのふとまらとをよま
その玉とゆるり時まふ日語ゆるり

光朝法師母

出でんよけきあもをあひんまをいれりすくを
あひんうしりきさふらとりふをとりゆるり

源仲賢の臣



東のいさしを此等とあつたといふそのまゝのまゝとあつた
五表目よりと傳あり

備後總領官

おぼろ言とやまも成つん若羽のしつりあつた

寛和二年花山院奇食上備後守官

春の来りたつた久みよりしつりあつた大中臣能宣朝臣

年よりしつりあつた久みよりしつりあつた

しつりあつた

後人より

金運よりしつりあつた久みよりしつりあつた

年よりしつりあつた久みよりしつりあつた

年意威

君よりしつりあつた久みよりしつりあつた

君よりしつりあつた久みよりしつりあつた

あつたしつりあつた久みよりしつりあつた

天曆三年大政大臣のちかかへしつりあつた

よりしつりあつた 大中臣能宣朝臣

しつりあつたしつりあつた久みよりしつりあつた

一乗院以時朝臣との人言よりしつりあつた

よりしつりあつた 是式部

今うねいも成りきこはるまじとありけり此の書に
花山院并合上書とありけり

藤原長経

若河の味とまはつりぬと云の書にありけり
題一とあり

藤原隆信の書

重母との分りきつぬとありけり

和泉式部

重母の分りきつぬとありけり
鷹司司女の書一賀の月令の序の二條
ありけり

赤深兼門

信乃神祇はく秘してまゝとありけり

春條晴表とありけり

小舟

じもてまゝとありけり
入道前を秘した大御食一とありけり
條可家ののこゝとありけり

藤原輔平の書

じもてまゝとありけり
同序の二大御食のこゝとありけり
入道前を秘した

あませとやうつら使きはじけのそ名いりやん
あまの素志近知るとは侍あり可と丹書と
あまの侍ありりあり

侍人あつ

まこととやうと書と驚れもあぬとやうにん
驚と侍ありり大申に侍ありり

いふと書はすしりあのもり侍ありり侍あり
正月におねと驚のあまと書とやうに

侍人あつ

あまの侍ありり侍ありり侍ありり侍ありり

選子の親といははと書とやうに侍ありり
いふと書はすしりあのもり侍ありり侍あり
いふと書はすしりあのもり侍ありり侍あり

侍人あつ

あまの侍ありり侍ありり侍ありり侍ありり
あまの侍ありり侍ありり侍ありり侍ありり
侍ありり侍ありり侍ありり侍ありり

侍人あつ

あまの侍ありり侍ありり侍ありり侍ありり
あまの侍ありり侍ありり侍ありり侍ありり
あまの侍ありり侍ありり侍ありり侍ありり

いとよあり ぬるに記永の辰

よ 弟の着い履うりてをわらうひきかたし
小野実乃を政大臣の殿の子目一約けり
よすのり
清原元楊

六年冬春のありし松をそそ卯辰あはひんあ

起ーら次 和泉武部

川のまんなかに自の松を又のまらて後その今も
正月自目よあやりて松あはひんあ
ゆるると見てよあはる後金あま

雲の神におのあり徳人のいふよりよあそをけり

正月自よあよりてゆるりて後還は師乃
りしより自目一あかんあつさあひんあ
口してゆるりよとをそとらたかしの後
つらーけり 契茂成助

多の表のゆるりゆふもよとのまらそよあま
今とふ案よかりまてと連部よのあひ
と申鶴よわらりてあり ゆるりて後給る

在大臣の方 澄信と女

袖ひけてるをやはらぬ小松原のまら
三条院川町よと連部 有とくあひあそ

一約多んに奇流中層水巻上物とんとあゆり
ととゆりのとたれいりのほとめて市院とと
すの建侍あり 海河右大臣

高りあり子の松とあふるまひぬきりにはひりあは
群一ら使 西多の経伝

後より世への流るあひひくす事ふの少松とゆせつる
兼暦二年しに裏方食上経伝けり

右近中将有原云実物伝
表代はゆりたれい中丁の松のちとせとゆりあは
正月七日卯日とありてゆりあはゆりあはゆりあは

伊勢之物

今これ世道の少松といふたゆりけをゆりあはゆりあは
正月七日卯日とありてゆりあはゆりあはゆりあは
ゆりあはゆりあはゆりあはゆりあはゆりあは
ゆりあはゆりあはゆりあはゆりあはゆりあは

大甲伝結室物伝

白雲れといふるいふれとゆりあはゆりあはゆりあは
和歌式部

まら世の世の描とゆりあはゆりあはゆりあは

後冷泉院御河守長衣多文院上徳治

中原頼成書

法皇御方人の雅も御りたりやまののりれあは
正月七日同防也徳のりつらうけり

藤三位

ねあつとめあはる年と實のあつたのりあつた
長衣のりてあつたのりあつた

大正言

山とこのりあつたのりあつた

徳司法師

うらやまのりあつたのりあつた

題一ら次

選子田親王

春のりあつたのりあつた
去那のりあつたのりあつた

藤原高師信

さかたのりあつたのりあつた

題一らす

曾孫成忠

と海にのりあつたのりあつた
正月をりあつたのりあつた

いひつらうあり

徳因法師

いあらん今もせむはのまらああこわらりのあはれや
題あり次 狭人ーら

那はく油く凡く浪くはのらむ苦のそらん
まら駒とらあり 権信正静田

ある世のまられ薄はのあそまらむし物さゆり
長久二年弘ら微教女師方合しゆりあり

去駒とらあり 深島長
まら世は清くうらま物とのら影とてあそん

屏凡絵とまらあらしむまのそらへいんの唯を
まらこらとらあり若原長徳

らこらとらありまらしゆの物らあそん

題あり次

和泉式部

秋まての命とまらと春の時と秋の古物と記とや

後冷泉院の時とまら文の奇合とあり

乃書成らあり 萩原花永の伝

花あそまらまらりまらあそんあそんあそん

屏凡絵と梅花ありあそんあそんあそん

らあり 平兼盛

梅くそたらりの風や吹つらんあそんあそん

あそんあそんあそん梅とらあり

大中臣能宣御后

梅のむせりあはるれ又ふれあはれ人の上りまきあは
去の宿乃中よりあはれ所へとふ事と信付る心

前大納言云任

春の暮乃やあはれあはれあはれ梅よりあはれ花のりり

題あり次

上はあはれ

梅くと整集れあはれあはれ梅より梅よりあはれ
村と山河原あはれ紅梅と女あはれあはれあはれ
たまひあはれあはれあはれあはれあはれ

清原え梅

梅のむせりあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

後人あはれ

わら着のむせりあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
題あり次

前大納言云任

梅のむせりあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
わら着の梅のむせりあはれあはれあはれあはれあはれ

和泉式部

春のむせりあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
山里の梅花とよと侍けり

か茂成助

梅花のきりしゆのさかきと里のゆふ人のあつらひとみり
春風軽き方とふんといふあつらひ

藤原政徳の臣

しあのみづはあかきまは夜後のさき風とらうらみり
梅花とせりてふんといふあつらひ

土家亮法師

梅のこゝとせしははまの秋半にふんといふあつらひ
大皇太子の御文と東三條の御文と
ゆふの家の紅梅とらうらみり我ら此の花

ゆふの家の紅梅とらうらみり我ら此の花
法つげのゆふの御乳母

かきりしゆのさかきと里のゆふ人のあつらひ
題あつらひ 大にふん

清基法師

ゆふの家の紅梅とらうらみり我ら此の花
風つげのゆふの御乳母とらうらみり
道雅之位の八条の清子と人のあつらひ
のまのあつらひと水あつらひと
あつらひ

左京権衛

と候ゆるり 大中臣能宣の臣

鷹の袖そまふつらあふふの苗代氷の如くさあむ
天徳元年の裏方の合の柳とらあり

坂上望城

あまのやうとあふもま柳の葉のいつまはるるあま
柳池の氷とらありとらあり

藤原経衡

池氷のひらきまそとま柳の拂ふあつえと何てをら
題とらあり 藤原元真
浅みより翻てあひくま柳の色とまま柳をまら

二月斗う良暹法師ののりうあまを
運てゆかれいんとくして花見とあんあむ
とあてつひの侍ふ物ととめてあてつ
りうあま 藤原孝長

まゐるあまののりうまてあまをまのいん
人くたえとゆりうらとあてつとあてつ
たれいはらうとあま

藤原澄隆の臣

山桜刀のたふとあまのいんあけ
二月のはらう花見あま後徳の臣のたえ

或一人くまをけりて知るとさし

とせゆるり 皇族文彦作

うまひの力さうれ持ら依との置れ花のまゝ

花とゆりけりてしゆとさうりて後

ゆるり 聖成成助

小藤く移まてあゝもんちゆとさうりて

起あゝ使 永源法師

栞花さういあめんさうりてのて風いさう

中本波町物伝

じあうと栞のもさあかてせて柳り枝さうせり

栞元任

ゆいりあゝゆらん山栞これ斗さうりて

一糸流所時殿と人に花んさうりて女

りさうりて 源雅通朝臣

あゝうちていふさうりてさうりて

威廿将

あゝてさうりてさうりて栞元さうりて

後冷泉院の時このものこともあゝりて

あゝりて後てさうりて念の一々のさうりて

てゆるりて 一宮後河

まゝの斗は梅をうらわらんこととていひしる
今と馬時殿と人しく花をいふは梅の
上中女の世にうらとて人ごうりて
言ふ

衣大臣小首

わくゆの心針は心さうあらん今とあつてを
陸子娘と花をかうら山里の女あつた
侍あり

源兼澄

とまんと契りし人の夢のうら花のうらと
題とて

兼主物記

いふとてあまし梅をうらうらとて
菅原為定

行あるをそとつりあつた
とて花をうらうらとて

小弁

山梅のまうとてあつて
とてあつた
とてあつた

上东门院中

あつた
白河院あつても

一 氏部之長家

東海の今とつや白川の雲母もくくたむかふと

見南殿橋

高岳軒定

月らぬとた方ゆくは力あはれんをたをまてその
うのあはこももあうとゆらんよまをたよ
とふ事とよこゆらふ

大武実政

春毎にうらとらすれを橋むあそく年たけりあふ
むとやむじうらとらあ

大中臣徳道約信

はらもあかあうりははこはまを人あはれあふ

河原院とてえらふ山橋とてえらあ

平一急威

たきこめてうの橋むん紙中りてああぬ

徳目法師

橋こもあうらふおりせらなあし物あふま

橋と我並てまあくやりのあふれ橋

狭人あは

極とけ一人あは者のうらむ白斗をあうあけら
まはた所とあうとらうらあ山の橋と見

ありてあり 和泉式部

ふらんめいこころ見せしむれば橋しをさうか
題ありあ

くそ見ぬ者上橋とくへれ花をてあはれを
我中のうらみとねりありあはれをさうか

道念法師

毎みめく人いふさうへんをさうか
金式部

帯と何あけあし橋をさうか
かけうきまゆりさうか

藤原公経約長

花をそ力たけき事しわを海まき浪のうし
海河太太他の九条の家をさうか
あはれふんさうか

前中納言基

我昔の指をさうか
題ありあ 藤原元真

あはれをさうか
承暦二年の裏をさうか

衣太舟通俊

五乳ららぬ梅と見て下りぬを風分今
屏風に極楽見花とふんとうあり

平兼盛

花分心とあつてよくゆらぶまら可也といは
屏風の絵に三月花舞あきらめまら
ふあつ所と録り

一とせよふいとおぬをまはしあつたををを
後冷泉院末末と申ける時々のあのこと
花らんそを梅院にまらかりあつて
つらつらり 良暹法師

うやまうまはあ人おじまてその梅と花と
通宗和長のとあつてあつてあつてあつて
今一ゆらりふらあ

源縁法師

心梅白きうのゆらあやまはあつてあつて
空法前を政右衛門と申すと申すと申すと
りらり 長部心斎信

花の花う一人あつと老いあつとあつとあつと
ほつあつとあつとあつとあつとあつと
あつと三月あつとあつとあつとあつと

うららかにいりあはせしまけりていふ心は
せし侍たれらるる

中納言定頼

はつを盛とされうらるる乃津の心と内規り
逢花能家うらと云をよ免

坂上定成

うそれら情ふ梅のうらふとわらふ意の
年毎に花とらうらと云をうら

源経法師

うらふとれあぬ山梅とらともの望まらむ

如陽院の花盛とあひてひんうら
山をえとまらりあつを
大由つ者ては軽つ形あり
とせ侍るわらうとく田舎
あつと後ゆとらうかん
うらとゆる

徳因法師

中納言の拾うもあれたらうと
是をきつてを故大臣い
うけ物うらと侍らうと
みまらうらまらうら

君のふるま物の事とまういあてに北条頼房の
きよふはうりけり

仲とゆも我のあやゆ花あけの結ふあてありし
言倉のつゝま乃女信花よふ白河のまうりけり
り種侍けり 伊賀守將

何事は致もえいふまうりけり白河の信見さりせり
うらのたまうり君のあてとくさけたうて
あうりゆりけりまうりまうりまうりまうりまうり
ふとありあり 大に近藤頼房

まの瓦と乃梅屋のまうりあてのあてまうりあて
まうりまうりまうりまうりまうりまうり
右原清家

右原のまうりまうりまうりまうりまうりまうり
園信のまうりまうりまうりまうりまうりまうり
まうりまうりまうりまうりまうりまうり

藤原通宗頼房

まうりまうりまうりまうりまうりまうり
花下志保とふまうりまうり

良蓮法師

まうりまうりまうりまうりまうりまうり

長中紀云東より花見侍多しぬのあり
こころには御あてしれりあてせしめ侍多

加賀左衛門

勲事との極殿とせりん事のかしゆむのきんあり
東と東院の四屏風の一人の侍とあり
所よりあり

深道河

あそこのなやゆんをいしよまぬまふらうれ
あつし屏風の絵上欄のむかしきけり
このあつしよりあり

わが書と送らりこころ欄をいしよまぬまふらうれ

ちゆき云はる事のかさりこころいして書法侍

らさり多し

中務卿 貞平親王

花とみか教りんむらう高所ゆさつまらうり

海

後拾遺和歌集卷第二

春下

三月三日とて花とて流して

花山院御歌

みちよてかりけり物とあそてうらさうらうとてあつけ物
天曆の時の屏風の花をみるあそとらふらん

清原元祐

あつらひのあはれまてうらさうらうの花をよみてあつけ物
世も春のさうらもさうらも侍あり

お羽年

あつたの花の梅もさうらもさうらもあつてのまよひま

永承六年六月祐子の親王家弁合
ゆかりのさうらの梅をよみて侍りうらあつ

河原右大臣

桜花のあつたさうらの梅もさうらもあつてのまよひま
題一とて

情のさうらもさうらの梅のさうらもあつてのまよひま
天曆の年さうらもさうらもあつてのまよひま

うらさうらもさうらもあつてのまよひま
大中臣能宣御歌

梅むきまゝに記さぬを何よりまゝといふの甚しむる
屏風の絵に梅花の教を記し置く所と後
侍けり
源道成

山室の教果ぬを花ゆへにふとあてし今を梅と
ふれまのてけて侍りてとあてし世の因に
よりて侍りていつてふのかりゆりといふ人
しめて梅のてけりて散るれいまよりて
侍りて
衣た弁道成
三つていふ梅のてけりて梅を記すまゝつて
山室の梅とらりて

梅成元

梅花乃其のまてあてりてすまを記す
隣家花よりあて定成
はくちりてあてりて梅を記す
徳原元揚

花の絵にまてあてりて梅を記す
養應二年に東後書より梅を記す
右京通宗の臣

梅の絵にまてあてりて梅花ありて
題し
永源法師

かゝる物故を著しん山内くゝ尋きりせいらりやと申一也
二月廿一の日の教とてしりみ侍り也

土馬門衣太臣

くまの山内り花の散る人物をふらうと申あはれりて
永義元年六月の秋子の親王の御成り
合一侍りくまの山内

太式之位

吹風そあつてゆきを揚むくちりまらまら一はら
題ありと
中紀云定頼
少くして花と云とくくは揚りまらまらいあはれ

家の橋乃地りて水とあつてとらあはれ

太臣あはれ

あふあつてみよとて橋花あのみとまらとて
白河あて花のりりてあはれとらとらあはれ
土馬門衣太臣

約束をせぬあはれ白川の氷とあはれあはれあはれ
栗田衣太臣の家とてゆりた花あはれ

くまの山内

とられてとてあはれ花とあはれあはれあはれ
庭の橋のりりてあはれ侍りあはれ

和泉式部

風よ吹さらけり守る庭橋らりてはまはれ狂ひて海
三月よりけり世をよとらり

藤原義孝

世みよのほ生る月のもつるまはゆらぐとらりて
ほらとらり

和泉式部

若きし折をそみよせらるるにそられ色とあら
な原義孝

わらとあり紅原の色とそらるるにそられわら
月の端とりよとらりてそらるるにそらるる

とらるる庭の若花と教てらる侍者

大申長徳宣和

友のむ感とあら庭の面とあらけぬ浪とまら
題とら

安原女御

はらちか深らるる花池とまはる物とまは
源為善和泉

藤原打てらるせとらるるのあやほら
兼磨仁年(中裏)可合と若とほら

大能云実来子

水色とほらとらるるの若とらるる若

二月遺書情書公とていふに備りたりあり

大中臣徳重卿臣

多岐の山にすむいぬて書の手をとりてん

三日百親のくふまかりてあり

永流法師

まへに事の手をに於て事してまゝにあり

後拾遺和歌集卷の第三

夏

二月はつらむ日あり

櫻文の深し歌をぬきて心静かきふりそ時

二月一日部公よりいふことあり

藤原明衡卿臣

明もまを悟りたてあきてくふ西の海に鳥か

つのはかりこそいふ所あり

徳司法師

秋やしの初る友のつらむ時伊勢の山をみるに成あり

冷泉流巻まよとくくの時百首の音まりる

中一

源重之

芳草の流計ふぬまりの蛇ひく物ぐあふれあふ

題一ら次

曹祜好忠

柳より卯月とされし神ふのめは葉柳りるるあ

心置の氷鶴とらるるゆるる

大中臣物詠

かゝる薄うらみのふせははるる何とくく水鶴

心置の卯月花とらるる

在原進家約伝

物とてらるるくまのたきまの寝のみうらまけり

西名を素志をい守りゆるる時と并時

よ命一ゆるる卯花とらるる

後人あか

白波の言せてるるくまのつら卯をさける境の女

題一ら次

月影と色とまける卯のまあけまののらま

まのの奇合よりの花とらるるゆるる

大中臣徳意約伝

卯をのさけあふるの時あふるるの境のまをらる

卯の祀を換ゆる

源道河

書とのいふまゝなつて卯むと冬をわらふとあつて
つらうのたふさうとふ所をいふ命一借るなり
らあり

元慶法師

我者の垣のふも町馬の道に軍に於て卯の祀
は月につこりりて右近の場と部とまうんを
まうりゆるりふ新あつるまて卯ゆるりる

堀河右大臣

町馬らあ卯のふのうしてらうすらうとあつる

道命法師一書と借るなり

藤原尚忠

家とわらうあつるまはまのふ町馬のふあつる
ら

道命法師

あつる部とのふ町馬のふあつる
様子内親王聖教のつらうとまをさうある
とてゆるりて年へくはと東院御時毎に
とゆるり人のりらうむらとあつるあつる
の目らんらうとほらうら

皇極文義作

米のりやれり成りて山に部とまうじう此用新りと
糸のほろりてうんざりの侍りりうしうとあり
さういふとさういふ侍りりうとちあてをな
ゆるきりたれいけうりうり

備前曲侍

阿馬のりていそあふおまはあふ人の告を成りま
月とくうりまうらの海よりゆゆて部とま
けんけつつと人のりいあてせてゆれ
大中に能直物位
こころをてまうさうあんけりるまうりまうりからあん

たをあらう事ゆけり法回念まで阿馬と受
てうあふ
備前法師

い法を秘してのまを法阿馬とり部とのまうりま
起しう次
播磨資茂

ういのさうゆとらましましあつてまあつていひ
永義元年六月廿日秋子日記とあつて
合うあふ
伊織を物

少いさうさう九時阿馬をまうりまうりまうり
能直法師

夜ふゆいあてうん部とま條田の森にたつて

藤原忠房約后

その夜ふと夢に神女と可成り二つありける人きつる
小舟

神女をてねつるらぬまの御伊勢の記に
依子の親王家の事合し侍りたる小舟合
あゝ是のちりくく同歌と後侍り

宇治前を政大臣

その月ふあまの都とて一夢の行りたる
宇治前を政大臣に中一集に合し侍
りたるとらり

赤深赤門

あゝ神をてくぬまの可成りたる
うまのつら痛と可成りたる
おぼさしそのかり侍りたる
あて都とて侍りたる

大に資約后

東海のみいとおとし可成りたる
都とて侍りたる

中流の地をのりたる
長保六年六月十日入道末を政大臣

家可合上遥内郭云云云とあり

大いおん

るごとく安ふふす可馬く一考のあるまじく
六月より赤澤よりふおきけり

道令法師

可馬のりくことお建きつてのたし秘まらる
郭と秘まらに教と安のま物ふ人のよりある
あかやけのいりこまりまて安の上情なる可馬
と安そとあり 律師長河

一とまきことあり一とあぬよりお啼きとぬけり

可馬とあり

徳目法師

ふあぬをぬわら人のあつらふる物と
大威三位

甲おぬとぬ物とまきり可馬花よりむのありあつら

小弁

秘でのまぐいゆらん可馬物ふおととあり

甲苗とあり

曾孫好忠

ふらりらあふ月と女とたりおけとありあつら

永泰六年一月御上根合ととありとあり

右原隆資

四月五日、いづれおぼかりたきこし、回りの音おぼし果ぬ
宇治前を政上は家とて三千騎の住み合
ゆるり、いづれおぼかり

桐横

いづれいづれのいづれいづれ、草薙の海はけしとて
文田の経長りかつの山庄とて五月ぬと後

右京院永範也

四月五日、いづれおぼかりたきこし、回りの音おぼし果ぬ

橋俊細

いづれいづれのいづれいづれ、草薙の海はけしとて

野一良

穀寛法師

いづれいづれのいづれいづれ、草薙の海はけしとて
有るり、いづれおぼかり

志慶法師

いづれいづれのいづれいづれ、草薙の海はけしとて
永承六年、四月、廿日、廿と、投合、いづれおぼかり

いづれいづれのいづれいづれ、草薙の海はけしとて
右大臣中将、いづれおぼかり、いづれおぼかり

大中将、神弘

いづれいづれのいづれいづれ、草薙の海はけしとて
國のいづれおぼかり、いづれおぼかり

年法任ゆるり所を建てるふりて

又のふり一月のふりあり

伊勢を物

ふりたるありてはあつるふりて者をもやむる

む物ともあり お摸

昔あつてあつてふりてはあつて

大武の遠

ひりてはあつてあつてあつてあつて

夢と種ゆり 源重之

夢と種ゆりてあつてあつてあつて

常法前を改大長年待のたあ今ゆり

夢と種ゆり 藤原良経の長

海ありてあつてあつてあつてあつて

題を改 徳司法師

いふありてあつてあつてあつてあつて

源重之

なるたはあつてあつてあつてあつて

曹孫好恵

長安を回つてあつてあつてあつてあつて

水心ともあり 源頼実

まのひらぬまてはつねを珠まへり凡ゆるらねて思ひん

夏の秋月よりふんよりのゆるり

去御門在大臣

元の夜月を程歩く入わし昔よりあはれを思ふ

大武資連

何れもめはつきりともあふをひつる響くわなのお月

宇治前太政大臣家より千種のはなを命

ゆるりし種侍けり

長部公長家

まのうらと涼しうらり月影を色白く人の影を思ふ

中絶玄定頼

昔夏の白くを色うらむとあつ錦よりうらむをあふ

たけら家あての夜とこあつとあつとあつと

うらり

能目法師

いふらんあつしの雨とこあつとあつとあつとあつと

越中守

曹孫好忠

いそみうらりあつとあつとあつとあつとあつと

平島盛

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

海河在方也

神とありて方の海にありてありて人と言われぬ秋をいふん
昔五五の月とありて

田方也

友の秋を明の月とみ方秋とていふは凡そ
後徳和の月とて既涼如秋といふと秋
ゆるり
源和徳和也

友の秋を秋葉とていふは凡そ
海凡そ友の秋とていふは凡そ
こころとありて
友は徳和也

友とありて秋の月とていふは凡そ
この秋を秋とていふは凡そ
ゆるり
源和徳和也

友とありて秋の月とていふは凡そ
六月とありて
ゆるり

伊勢を也

水とありて秋の月とていふは凡そ

後拾遺和歌集卷第四

穂と

秋のけらあり 後人かきあ

くらきたに結すこしと雲のつらむ秋をさるる女ら

あは度法師

浅草家まきく草のう風とくう所りつ秋草とさる

あはさのうと強ゆるりり

友原内記納臣

そのの嬉らうふふ力飛くあは秋の風を涼しと

七月のうらふらふ小舟

いとせのこひのうらふらふと七夕のちとせよめゆめん

七月七日座申しあはらとほりつ後り

大に佐雄

いそあふあけらさん七夕乃福ぬまあつる天の御衣

七月七日宇治前を改ちたの如き陽院の家

あそくくさけあたらうてあそひつる懐

牛女言志んよらと侍り

海河右大臣

七夕のちのちとけらさひと金そめらと青月あつん

七月七日うらのたさうたつつけてゆるり

と縷乳母

天の河と海と船と舟と風雲と草木と鳥獣と人の子と
長能く家としてセリメとらある

能目法師

秋の夜と春の夜と物と人引合の秋と人の心と
七月七日とらある 梅元任

七夕のあふ家の板の俺つとくろ月毎のあふあふ
衣大お通唐

ゆるゆると転とらると七夕のあひまわ転つとまま
七月七日とらあるこのあふあふのうけとらある

あつとゆるとらるとあつとままとままとゆらあひら
夜とらんとて續ゆるら

新た束の

あつとゆるとらるとあつとままとままとゆらあひら
七月七日とらあるあつとままとままとゆらあひら
あつとままとままとゆらあひら
あつとままとままとゆらあひら

あつとままとままとゆらあひら
あつとままとままとゆらあひら
あつとままとままとゆらあひら
あつとままとままとゆらあひら

藤原家傳和伝

そはにの秋をさき世に雲のうらほる秋のよ月
客依月本とりよふとく人のよのこころもほゆる
くらとよある 右に中将公實

あはしくさくみり秋の秋の月をいよとゆるけし
花山院 東ましとくくら町 玉院におりま
て秋月と観るひくらと後付る

大感のまを

秋の夜月見とめて新文の秋を目的のつてあ
と象太政大臣たふとくわとて前載しん
節りてあこふえいらのよの十六人とさくひて

あらしゆりあらしと水と秋月とさふとらと
ゆりくら 平善威

あらしの代とあふてはあらしとさくらと秋の夜
と師の衣とに家とあ合とゆくらと秋
の月とらある 保る善物也

あらしのさくあらしと秋の物とて秋のさく
河東院と後付る

惠慶法師

まにまの昔の人もあはれとくけとる秋の夜月
好くら次 永源法師

力とありては神も秋の月山のありては人も待た
る人今成ての秋も敵の月と成て待たる

源氏物語

らそありては神も秋の月山のありては人も待た
る人今成ての秋も敵の月と成て待たる

源氏物語

つとら月とては秋の月山のありては人も待た
る人今成ての秋も敵の月と成て待たる

源氏物語

任そありては神も秋の月山のありては人も待た
る人今成ての秋も敵の月と成て待たる

源氏物語

源氏物語

任そありては神も秋の月山のありては人も待た
る人今成ての秋も敵の月と成て待たる

源氏物語

任そありては神も秋の月山のありては人も待た
る人今成ての秋も敵の月と成て待たる

源氏物語

任そありては神も秋の月山のありては人も待た
る人今成ての秋も敵の月と成て待たる

任そありては神も秋の月山のありては人も待た
る人今成ての秋も敵の月と成て待たる

河右大臣

形とすう元と月と御と秋あうううううう

右原隆成

うにまにらふひ月と悟とあねとえんげの秋の月

赤深兼門

と秋と母とあううのゆうけと何とくく月とうん

題一原

徳令と

秋とあううううと書月と月とあうううううう
あうううううううう八月とあううううう
あううううううううううううううううう

光原法師のうううううと云り

法原え物

ううの花のううううううううううううう
鈴りのううとあううううう

大仏資物

と御り秋とあううううううのうううううううう

前大物と云

年とあう秋とあうううううのううううううう

あ

葉中一

あううううううううううううううううう

長恨秋の結上玄宗りとのありて思ふ
かに草とくはてて帯かけを結つるこゝある
所とらあり 道令法師

在る浅茅うあゝ葉果てらすく虫の食ひの
く 題うか 午慈威

めさりの秋の分るあゝまわつてくふ物出さ
大に道衡和信

秋風よあよりの結葉のつのおあいつくあゝん
曹和好忠

なけやのまを蓮の根の巻さひの杖にけあそあ
寛和元年八月十日也裏新命よりあり

藤原長能
わきとああけてゆんむれと書はくひのら物居の勢
冬うつひのらは居啼くらとあてらあり

赤染束門
やれものわらきせとあゝあゝありあ居る
清冷泉院のし時衣のまのあ命と結る

伊槻木物
されあゝ衣のあゝと帯居あゝのあゝん
八月よりあゝあゝのあゝとあゝてあゝ

ませ給うるに振中一書局よりふん紙

即し紙

りて折たし馬札馬の(um)のふりこふん紙ををり

八月駒並と給る 良選法師

お坂の扱のじし之れりこふん紙ををり八月駒

深倉法師

今のお坂の扱の駒のふりこふん紙ををり八月駒

八月駒並と給る 良選法師

深倉法師

八月駒並と給る 良選法師

御林より人よりて心家御晩とふん紙

らむ給る

深倉法師

言のい後弟より此書のひて尾との麻を給るその

乙基の丹後給るその給る河玉とてふん紙

ゆるり給る

すーき

麻の若く給るとふん紙ををり八月駒

秋威の麻とふん紙

深倉法師

八月駒並と給る 良選法師

八月駒並と給る 良選法師

大寺住持能宣和尚

秋葉の暎のりしあけの宿のりるふ花のよものつまも
大寺の右大住持能宣和尚より能宣和尚

源為長和尚

秋の化とあつふふさるる麻の香と秋のよものつまも

題一ら夜

安法法師

秋のりる麻の下束の紅葉とてあまのりさるるあつふふ

能因法師

秋のあつふふのりる麻の香と秋のよものつまも

新着野亭よりあつふふのりる

穀覚法師

今夜とて麻の香と秋のよものつまも

輝一ら夜

高原長徳

秋のあつふふのりる麻の香と秋のよものつまも

秋のあつふふのりる麻の香と秋のよものつまも

しげふ

大武三住

秋のあつふふのりる麻の香と秋のよものつまも

藤原家経和尚

麻の香と秋のよものつまも

心侍住

小倉ぶらりしてゐるわが家に書きたりせらる麻を記す

題ふ知

八束武部

晴るの物そりしき秋寄い公のうらゝまゝもあつん

天衣座を源心

けりかに命と申とあふか方の秋に秋果るま

物あし事まけけるは秋と見せらる

任増太物

あゝあゝあゝの海つ霧のこゝろ吹さる秋のふれ風

こゝろこゝろあゝとこゝろこゝろあゝ

能母は師

あゝ事あけまゝおまわりの神さうこゝろあゝの秋のあ

秋の神さうこゝろあゝのあゝとこゝろあゝの秋のあ

新太物

まゝこゝろ神さう秋のあゝとこゝろあゝの秋のあ

あゝこゝろあゝとこゝろあゝ

中絶云々

今秋もあゝ秋の神さうこゝろあゝの秋のあ

い月つこゝろあゝのこゝろあゝの秋のあ

和泉武部

限あらん中ゝあゝ秋のあゝとこゝろあゝの秋のあ

そめりあつ人の家之住ゆりは蘇のあつ
等てゆりなるに或あつ一ゆりゆてよとあつ
あつりひつう一きり

筑前乳母

白鶴と公と住てあつたあつもあつ着り秋
いよの花と人のあひとりあつらあつ

橘別長

正方よなむ扱ふよと物といつてあつん着り秋
題あつと

源時徳

あつてあつら着り浅芽生に結る秋のり
あつと

藤原通宗約長

秋風下あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと

藤原花永朝長

けさあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

藤原法師

いよ野のあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつと

藤原長徳

あつとあつとあつとあつとあつと

寛和元年八月七日田舎并合の修白り

楼為義和伝

いりてむあゝぬん夕なれは秋の葉ふに結ふまゝあ

題ふか

良暹法師

袖ふれあふあ道なり秋のいまりてしそ約ふりける
去陽門太大臣家并合よりり

源親能

地の井をわへをむおりたりこふれきん家并家
秋あ我の中よりりあて酒あうて世の中り
秋あんまあてりいしてり免り

大中臣能宣和伝

草のこゝ並てそあす秋のれあておれあ我もさるへ
人あ家のおれやりの女房をのゆるりと後ゆり
あり
海河太大臣

よまへへけとらせいんあ記あも色あ物あそま
えのおはさうし前裁やりり野へてあうりたり

よはらりけり

梅別長

か節むあがらあのこまうまれ空るあうこもあうか

題りら

前律師基玉暹

秋風あ道りすああ記あへん秋あ記ああ

天曆の時の御居のよふに
のこる所とあり

清原と栂

秋のつかりそとれぬつ
毎家有秋といふと御製

常毎と秋のつと御製

題とあり

深田河

うまのこみつゆり
横とあり

横とあり

和歌式部

ありそよしたのこ

野一良

深田河

いふおあきさめく
村と正可八月
てわさせゆい

奇之妻御

はるそよあや
とあり

後人あり

我の葉と吹そ
賢良明臣の

二葉小右道

きりきりとあひくくいさききと秋のふきくれを吹める
あんとたのめて侍りたるはくさくさのゆきとこきりけり
秋風の涼くくりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

信邦実撰

美の葉くくはのめり風のきりきりきりきりきりきりきり
花山院のふききききききききききききききききききき
くさきききききききききききききききききききききき

右京七徳

あきとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

し里の穿きとらあり 大納言権佐母

あめらうのぬりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
土師の石太右の家言合とらあり

右京権衡

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
秋と花とねと云とと秋と云と

源師賢の巻

あきとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
三層の四の屏風とく月とあ夜あ載とらあり
秋と云とらあり

徳永左衛門

あーるを極うのちの秋意のちの何れか秋を言ん
うーるをうりて水色秋花

大中は能宣の位

水の色は花の白いと云うては色の秋の神と云ふ
彦秋秋花といふうらなと

岡白前大夫位

秋意の秋の神といふうらなと云ふは秋の神といふ
思時をいふと云ふうらな

良蓮法師

秋のちの秋の神といふうらなと云ふは秋の神といふ
如くは

橋美法家言合と云ふうらなと云ふは秋花といふ
と云ふと

源光家初位

うらなと云ふは秋の神といふうらなと云ふは秋の神といふ
源光家初位

源光家初位

秋のちの秋の神といふうらなと云ふは秋の神といふ
源光家初位

秋のち

良蓮法師

秋のちの秋の神といふうらなと云ふは秋の神といふ
源光家初位

源光家初位

あまのこゝろと事とらんふとく物とてまゝに秋の風

復拾遺和歌集卷第六

秋下

永承四年の裏奇の命の孫と後侍より

中細玄資總

うゑのこゝろをわづらふとて秋の風とてまゝに秋の風

伊勢之橋

さきかへて衣をそへておろしけりて秋の風とてまゝに秋の風

若原兼之房物臣

うゑのこゝろをわづらふとて秋の風とてまゝに秋の風

北山院方よりまじり侍り

右京長徳

昔の振りありく一と結のよ月あ人のいふまはり
選子の親王よりきく守えたる河九月の千の集
と勝ちふありまてくつありむらこきくこい東
とありらふありしありてふりし有り

変院中務

月がうらみき風のききなりありし結ありき
山家結風と云ふとありあり

大宮殿前

山家の結りむらふ海ありしありし吹そありあり

題下知

源道深

と流せむ葉くこりり山置の結くそく結たり
永業四年内裏より合り

西河右大臣

つるれいありむむの葉すりらそむ毒のすくまらん
字流ありてりらと敷ふとらむ侍らるる

右京経衡

りあつらうあり葉この多きを結の程ありあり
とありし侍侍りらる比人のりありし侍侍り
つらひて侍侍りらる

上東門院中將

このはみちの徳小知葉をて麻ををきけ枯る山内
居凡信事申せりて葉のり所とある

鳥いままけきし葉のさるのありのり
葉のひあささる今とらませ給治

まよりゆるり

たふ弁通俊

いふれい葉の心小知葉をみ枯る山内とある
あの一の葉に任ゆるり人のあまよりては葉の
菊とてとらりりあき法師

うさるまいあてて葉をての葉をきけりあり

中細云定頼りて一と侍りりり葉を花と

うてきりあり 大蔵三位

はるらんかこそのあまをて枯るるん白葉を
と葉の信は菊食一ゆるりりたのさしはるり
とてゆるり 任職を物

うさる葉の心小知葉をて麻ををきけ枯る山内
藤原義忠給治

はるらんかこそのあまをて枯るるん白葉を
はるらんかこそのあまをて枯るるん白葉を
はるらんかこそのあまをて枯るるん白葉を
はるらんかこそのあまをて枯るるん白葉を

本苑の長尾

物まじりにまはるる葉はなまにまはるる花のよけのぬり
菊のむぎやうらまのあつらひのあつらひのあつらひ
うらまのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

赤澤あつら

とくまにまはるる花のよけのぬり
天鷹のふ時雨屏風の葉と散家あつら
うらま

徳永えつら

ふくまにまはるる花のよけのぬり
屏凡始の菊のむぎやうらまのあつらひ

やまうらまのあつらひ 大中尾能宣のあつらひ

うらまのあつらひのあつらひのあつらひ
うらまのあつらひのあつらひのあつらひ
うらまのあつらひのあつらひのあつらひ

良道法師

白菊のうらまのあつらひのあつらひ
お檀のあつらひのあつらひのあつらひ
うらまのあつらひのあつらひのあつらひ

右原経衛

極楽のうらまのあつらひのあつらひ

家よりあるまじりて任付たりとある所をいふ
の通とてあそひ侍りたり

中納言定頼

我のまじりたるもの色と書きしなり
永承四年由良寺合に獲るなり

中納言定頼

安らぐ所とて置る所なり
寛仁二年正月入道前左衛門右衛門
下は御食一侍
より屏風の上置の御書と見ゆ人
きりあはれ
ゆりたり

前左衛門右衛門

山置の御書と見ゆ
屏風終りて家より男と見ゆ
のまじりたり
平島殿
くみりたる御書と見ゆ
山置の御書と見ゆ

清原元輝

紅葉の御書と見ゆ
月おほきと見ゆ

御書

紅葉の御書と見ゆ

お模

秋の園上はゆるり秋の山はゆるり秋の川はゆるり秋の甲苗をりり

題名知

源頼朝信

夕の空すすそ雲の薄さいよりのまのくく秋とまのあつらん

九月十日秋と坤じいんとりり

藤原花永朝信

のりりいよりの秋のうりきん善の秋は信じ信り

九月廿日秋夜信秋んと信信り

のりりいよりの秋のうりきん善の秋は信じ信り

九月廿日秋夜信秋んと信信り

法眼源賢

秋の園上はゆるり秋の山はゆるり秋の川はゆるり秋の甲苗をりり

九月廿日秋夜信秋んと信信り

大貳賢通

秋の園上はゆるり秋の山はゆるり秋の川はゆるり秋の甲苗をりり

九月廿日秋夜信秋んと信信り

源兼長

秋の園上はゆるり秋の山はゆるり秋の川はゆるり秋の甲苗をりり

後拾遺和歌集卷第六

冬

十月の流いづりこころのこころもあそびのまじり
てまはれ侍りけりありあり

赤大納言云任

さらさらお葉とまはれお新川のおを記はれあまのこころあり
十月ははらりはらりみちのあまのこころあり

信正源光

鳥羽のまゝをよめるの錦を御正月あまのこころあり
兼保三年十月今上みちりの次にお新河

約筆をせ給しりまをせしむる

御新詠

お新河のうたにあらんと為事て元の山をみちりしをあり
うらの山をたてて河内のおまゝしり侍れえ
らあり

藤原兼房約筆

とあつては次をすり河内のおまゝしりしをあり
山雲の河内と侍りあり

水汎法師

秋は月おとけり枯らるるをてわらふ心をさるる
高葉のあまのこころあり

源賴実

子の繁らりて家の中へ事なれど河内を治りて其の事なれ
右京家持御に

紀伊地方を治りて其の事なれ
十月より其の事なれ

能因法師

非月秘芝を治りて其の事なれ
宇治より其の事なれ

橘義通御臣

あふ木より繁みは世に其の事なれ

宇治より其の事なれ

中絶玄因侍

うら河の事を治りて其の事なれ
後醍醐天皇の御臣とす
其の事なれ

右京家持御

右京家持御の御臣とす
永祿四年に其の事なれ

海河家持御

海河家持御の御臣とす
お模

那改し物事川増えまゝの島海りて人々の聲はさる也
題ありき

和泉武部

天いしは不徳といふはしとくは果つらんをたの里
冬月と終る

大蔵三佐

ふのころあのみぬりらん人のふをりつる冬月
後子の信書約たりてしりあを後ゆるり

藤村長家

とらんあはれたれいおとあ言けの元よあせつる
庭書とらゆる 徳目法師
おとあ言けの元よあせつる

律師長海

莊系もあはれなりみらん母あまら初子のころあはれ
屏風繪に十月斗の女のりた人といふを
可といふあり 大津信定おと

おとあ言けの元よあせつる
病指の草と終る 少輔

あはれ言けの元よあせつる
おとあ言けの元よあせつる

徳人不知

あつらんあの中あといふ終りてしりあを後ゆるり

そのはりの庭の本は葉紙よの程と拵てありとみよし物
敷よりあり

大に公賢朝臣

松の松と樹とにけつ園のこころとてつく計あり

山とこの敷と樹と 横依總朝臣

ふくのふにきくらふの我高とつる敷は言せりあり

永義のほに裏より合し初書よりあり

相模

即のよとつ書とれと松とつ松の葉紙と記あり

埋火と樹と 素意法師

ふの火のあよりまのふりてあから書紙とてとを

深敷式部このみこれ家より松と書とまんと

つと樹のりりこあり

藤原田行

あの手と松のふりよりあまのくくまわ物あり

隆経朝臣甲斐とてゆりり可あり

つらり一とあり 紀伊式部

何とていふのあはれまのた書ありとあはれ

山の書とて樹と 能司法師

繁久人のうらとあはれとあはれとあはれとあり

起不知

源乃師

物も重き事ありて元とて後世への福あり月を抄き

其宗法師

ありてみよと書きて海をたれとせとる人いゆん

藤原四房

いふ事ありてあまの鳥あかの志と山をまるとる

徳着の書とよふと成りあり

清吉四基

徳の草の花をよめたりとつて書成りてそそり

屏風繪と書ありてふあまの娘とるあり

赤津赤門

らあり

あまの草の人のあまの書と成りけりて書成りて

道雅と位の八条の家なりけりて書成り

書ありてまゝとてつとありてあり

友東経衛

書ありてあまの書と成りて書成りてあり

源物家朝臣

書ありてあまの書と成りて書成りてあり

法師の書と成りてあまの書と成りてあり

の書と成りてあり

仁藤法師

あつて書いふらうとて記さあける人のまゝと

題字が

和泉式部

ありつてまじの源氏物語のまゝと云ふる書れ付え

天曆の御時海凡の年十二月廿九日

らあり

信原之物

我者ふよりあつて書いふらうとて記さあける

書いふらうとて記さあける

あり

入道前太政大臣

あつて書いふらうとて記さあける

書いふらうとて記さあける

前太政大臣

あつて書いふらうとて記さあける

信原之物

和泉式部

あつて書いふらうとて記さあける

題字が

信原之物

あつて書いふらうとて記さあける

あつて書いふらうとて記さあける

と信侍り

信原之物

あつて書いふらうとて記さあける

と信侍り

信原之物

復拾遺和歌集卷第七

賀

天曆丙時賀小屏風秋立春日

源順

ふとらふゆふて結ぶしるもせの喜こけりし契を
入道前按政の賀しゆるる屏風のあはれ
こころにしら所とらあは

平兼盛

折るあまの揚る極久きけりよのなまらふ
あまの屏風のしるのこころをゆるる

しるし時成るれこころにみませの来を記るる
東宮東院の千賀しゆるる屏風のあはれ
かろころりやりてふれいし所とらあは

源兼隆

産るふあまの賀の初めれいそあをまらふ
前信正明書の中賀しゆるるの字派あを
大徳竹の法えきしるる事と秋のき

前律師其不選

春とりの年のふとら成る老のさゆれを
い裏の屏風の命とら人の家と初と病あ

衣太極

是も又毎の夕きしむるにわいそふ松の二葉あつた
ぬ將敦敏こらませゆるる七葉よりあり

清原之極

唯少松大原山の種うれふとせいにまうせて候し
匡之肩約はうまれてゆるるころふとあつて
侍連はゆるるふとせよりあり

赤深出

このうこの初んまとも思てふの鳥の毛衣年ふとあつ
あつあつふとゆるる

ふせやむるふのうられさうさうさうせぬ家のあつたけり
あつ一親生のいつさうせつらうさうさうさうさうさうさう
あつらふ事ありてうらうさうさうさうさうさうさうさうさう
大信下福上のあつたけりてさうさうさうさうさうさうさう
見て候ゆる

衣太極

あつらふ二葉の松よりけてよとあつたけりてさうさうさうさう
みこらうとゆるるあつたけりてさうさうさうさうさうさうさう

衣太極御製

あつらふ二葉の松よりけてよとあつたけりてさうさうさうさう
はとあつたけりてさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

表代のくまはくも何れも何れも限あはま
冷泉院のくまはくも何れも何れも限あはま
いあつてくまはくも何れも何れも限あはま

冷泉院御製

表代のくまはくも何れも何れも限あはま
冷泉院のくまはくも何れも何れも限あはま
いあつてくまはくも何れも何れも限あはま

小太郎

表代のくまはくも何れも何れも限あはま
冷泉院のくまはくも何れも何れも限あはま
いあつてくまはくも何れも何れも限あはま

くまはくも何れも何れも限あはま

藤原範永御製

表代のくまはくも何れも何れも限あはま
冷泉院のくまはくも何れも何れも限あはま
いあつてくまはくも何れも何れも限あはま

良暹法師

表代のくまはくも何れも何れも限あはま
冷泉院のくまはくも何れも何れも限あはま
いあつてくまはくも何れも何れも限あはま

うらなまきとらふしとくをむゆの母をうらうらな
陽明門院とててててててててててててててててて
に侍候
ひらたのきとらふしとくをむゆの母をうらうらな

後拾遺和弁集卷之八

別

糸主輔親回念(お下らんをあげのしつものた
ふりおまゝとてててててててててててててててて

惠慶法師

おまゝのうらうらとてててててててててててててて

お

糸主輔親

惜しむ那の経業をうらうらとててててててててて
回念(お下らんをあげのしつものたふりおまゝとて
うらうらとてててててててててててててててて

源道深

たあふあふとてゆふも歌うと邦あつとく人の若はる
東まうりあつとて来とあつ自強ゆるり

深基法師

初あつけと斗ふとつあもおとて人とあつらふ
まの守の思ひ下つらとあつあつらつ解はる
つらとつら

藤原道信朝臣

つらとつらとせむのつらあつたの部とまうしたつら
あつらつたに歌はなまうりつらとつらとつら
源の長約とあつらつらとつらとつら

藤原惟親

重海のまうらつらつらとつらとつらとつらとつら
あつらつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら
あつらつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら

藤原長能

よのつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら
とつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつら
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつら

選子内親王

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつら
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつら
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつら

藤原为家

めつゝも代々しむるおあまのしにのねあうあやれ
人のとほい新いまはりうまはり

友原信右衛門

ふれおちうもあまお中にとりいふあまをん
入道持政のう侍りはた細え及緒あやう
ういゆりうと隆奥まきりうとてみま
あやうとて女のすうまうとて侍り

友原倫富丁右衛門

表とのとれし懐るんふとゆまをくあやうゆら
あやう
入道持政

我とのとたのじとらひまのねるも代々もあまをん
ううとらりて侍りうとのりんとてあやう
あやうのりうと流ううあやう

湛庵法師

ふれおちうもあまお中にとりいふあまをん
源頼清おはみらのくうとてあやういこのあま
あやうと下ゆりうとあやうのあやうとあやう
あやうとあやう

桐操

ふれおちうもあまお中にとりいふあまをん

うと記つてもうとありて下付たりよ今とあり
てはうとあり

つりきつる命とあり人のふんまをて悟く成ぬ
ほくまふりてまうら下ありとありのふのり
らり能因法師くつりつり

大いふかえ

命めと今ゆりめん津の國のあふ地にのあれを
播刈光みらのふあり侍たりとつり
つり物のおとありと白川の宮とあり海女たり

中納言連頼

義通朝臣十二月のはりいさ休の使とゆり
けり二年あけいさうあり侍るん事ありと
て錢あまふたりとあり侍るん事ありと

播刈長

のちいきてふらりもゆき候とあり井とありん
後集らる人いしまの餞とあり侍るん
酒たりてり録りするありて和あり
文りまありとありとありとありとあり
侍たり

基元記法師

ゆらりて我をうありとありとありとありとありとあり

ゆきしるのかりては良規法師のりさ
きききき 須念の次

わらふ中しるのかりては良規法師のりさ
良規法師

余波あるとありて友藤の入りたるまき法師也
能得法師いふのありて下けりてわらふとあり

さて

友原家経初也

去る花秋の月ありて契ひて久きを初とありては
徳周法師いふのありてはあり
けりてしてしるの候してありてはありと

いひゆきしるのあり 源為長

昔はたのめては春ふり花の登いりてはあり
こころふのありてはあり 侍ありと

源道河

思ひたるありてはありてはありてはあり
能くはありてはありてはありてはあり
よりあるありてはありてはありてはあり
こころふのありてはありてはあり

中納言忠頼

石のまじりてはありてはありてはあり

つらきとてわがのいふはのりそ後のつたにきく
女もあましく成て程もあくまにわがまらけ
まの女のりしりそ升るるふしつとをわのり
きよのちららんとしてゆるれいせきつら
らる
祭主物記
年事い重升るるふゆら丸んようね程いあ〜と
つら〜まらりらるじとあよ

若原薨信

ゆりそとそしとらゆるらるん老て久〜きくい
つら〜あてのりりゆるらる〜く〜別

ゆるらる〜とらる〜 連敷法師

はらぬま〜とて摺〜そらわにゆらわの海女らり
あま〜ららとて徳用は〜のり〜計り
大に書

あまのたの部とゆるひ〜とららりえり
奉昭法師 入唐せんてつら〜とせ
七月七日毎このまゆるらる〜とらら

前大納言云仕

天河のぬかふふらけきとらまあ〜あ
入唐しゆるらららり浮ららららららら

常服法師

ろの程と整ひる後、朝ふまに九拂りありとせ
成爲は、唐りやうりゆりては、女の
りよくつひつうりある

後人あつた

い斗を成の事と新んつて、や、井とあるぬわん

後拾遺和歌集巻第九

霽振

石よりゆゆるる、たより、井と法米と

ゆるる

海河大政大臣

おぼの言と受けとを、井のあといえ、よりそのりあり
十月より、と、物、あ、より、りて、ゆるる、と、曉り
帝のまゝ、と、後、ゆるり、計り

前大細云は

り道の、綴、の、色、と、み、つ、く、と、霧、と、り、あ、い、は、記、と、い、
中細を逆転

なり

第... 紀... 葉... の... み... 及...
... 紀... の... 紀... の... 紀... の...
... 紀... の... 紀... の... 紀... の...

紀院御前

... の... 紀... の... 紀... の...
... の... 紀... の... 紀... の...

懐香法師

... の... 紀... の... 紀... の...
... の... 紀... の... 紀... の...

少将

... の... 紀... の... 紀... の...
... の... 紀... の... 紀... の...

友原武行

... の... 紀... の... 紀... の...
... の... 紀... の... 紀... の...

徳昌法師

... の... 紀... の... 紀... の...
... の... 紀... の... 紀... の...

徳基法師

... の... 紀... の... 紀... の...
... の... 紀... の... 紀... の...

あはらうと侍り

和泉式部

車とりありのまふく坂馬の事と我のうせよ
正月のうり遊ばしきりききゆと鏡山とて雨よあ
て候ゆり

勲慶法師

鏡山あゆりきもあまのりたりのりさうりりり
七月はいつら尾流くらりりりりりりりりり
開山あよと志り車とさあそあきと侍り
と侍り

赤深来門

我の部もきき成ぬく言のク凡とりりり満
延き候

堪基法師

久文のりあまうあそその部の山いれあふん
津のりあ下侍りりり振着遠望んと候ゆり
言ゆ

良蓮法師

りのりあはるるまらきそあけあゆり伊勢
為長約は三河守とそり侍りりりりりりりり
とふやりのりりりりりり信法のみふあといふ
て候ゆり

能因法師

白雲のりりりりりりりりりりりりりりりり
東海のりりりりりりりりりりりりりりりり

深雲之

礼山院沙弥製

月影松の影をてらつと新とみ成松のこ松とみ成
橋下乃の影をてらつと塩湯あまの影をて月乃
あつりける新中文のたえあつりける

中納言賢徳

おやひか都の影をてらつと新とみ成松のこ松とみ成

ひ

繪式部

あつりける松の影をてらつと新とみ成松のこ松とみ成
常陸の影をてらつと新とみ成松のこ松とみ成
あつり

康賢王母

月影松の影をてらつと新とみ成松のこ松とみ成
常陸の影をてらつと新とみ成松のこ松とみ成
あつり

橋為善の影

あつりける松の影をてらつと新とみ成松のこ松とみ成
あつりける松の影をてらつと新とみ成松のこ松とみ成

藤原四行

あつりける松の影をてらつと新とみ成松のこ松とみ成
あつりける松の影をてらつと新とみ成松のこ松とみ成

お高前の人

ちりあしあまりふかり物便あゝかろいさうせよ伴の務者
つらふ下傳者お上の名をとりお所をて務約あり
師前肉大長

物とあふ公の着しうきされ何う此浦もく入り
あざむとあふされゆりうら道とて務約あり

中納言隆家

きよせいの如のおとせりせあうとてあきたる我の
伊白園より十二月の十日は一年のりてまら
のかりけり

武部を物資業

いそきつゝあもえさのり年おらたむの如きお

洗うしりののかりけりたさくといやうとあ
こらとて務約あり 右左弁通儀

あや映せとのほあしよあせよとあふとあふと
あらしりあけりけりてあせよのりて月
あふとあふと

播磨伴約長

あふとあふとあふとあふとあふとあふと
まのほの中りりののかりゆきあ道とて務

深道源

あふとあふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふとあふと

いぢけし旅の虎の毛をばらばらにけの浪の勢ゆるぎ

後拾遺和歌集巻第十

哀傷

一糸院御時皇孫文おられ給くは恨のこころ
のひもこほひ知れらる文と君つげさるる
くらあまの御んせせよとあかつかうと奇
まふにけられらるるあま

物すす契一事と憂さあひん海の色そゆが
知人もな記ありよとをそんりそらとけり
物も女のまらりあふ所よまらりあふよま
かりとまらりあふゆかた

深草長

ありしを思ひしれ年事とありたの世と共くありぬ
山寺にありてゆるり人としてくすくすみえ
ゆるれいあり

和泉武部

主のかりにゆつてきりふつ又我と人のあこえん
三條院の星旅交うられぬひてゆきさうり
秋月のあつくゆるれいあり

令婦乳母

ふとてくさうらぬんく斗のこふすあり月小燈
香麩院は星うせと後入ぬひては星燈の所

ゆきさうゆるりこことせい所引てみ言とせぬ
一事のあこおてゆるり

ただ将朝光

雲の雲はひてとさや雲の霞りあてみんさ
大和云行成

とらりり幸此みお記さひと嬉うらぬ人のあこ
長保二年十二月の星旅交うせとせぬてさ
さうの春雷のありてゆるれいせけり

三條院陽御殿

野守とて公のあこぬきもわら筆とさうとあまん

入道前右政大臣の御葬送の約しんにお返の書
のよりてゆるかし候約りり

法橋忠命

菊池を寄つりあけり鳥野の鳥の林のちりて
入道のお書お禮あひして葬送のよめまはり
て又の目あつりつりつり

小侍伝令婦

晴とてあつりあつりあつりあつりあつりあつり
二月廿六日のまゝあつりあつりあつりあつり
のなつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

相模

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

山田中務

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

桐模

とうやとをりてふたにをりていりていりて表の神の形あり
なり

大和宣旨

後河内守の命をともす神の神斗とい人のまゝむ
後醍醐天皇の中交九月十二日也此をいふ
のり朱彦院御時又弘之徴殿申交八月
ふくれいもういふまゝに信實をいりていりて
か將ういふ可いほりていりて

前中書省宣旨

いりていりていりていりていりていりていりて
左書省御経成りまゝいりていりていりていりて
とのあつていりていりていりていりていりていりて
ありていりていりていりて

小太道

ふりていりていりていりていりていりていりて
靈山といりていりていりていりていりていりて
ありていりていりていりていりていりていりて
ありていりて

能因法師

いりていりていりていりていりていりていりて
右書省御経成りまゝいりていりていりていりて

あふいさつうあふ

右大臣の書

い針さふくさくし本邦の吹雪一帯の飛乃々ふれ
親をくちりて守事とゆるり人のりくさきう方

後人あつは

山雪のさくろり響え散らり本邦のふいふさふい

出羽弁ら親ととらむてゆるりんと守てあふ

わいつとさるり事あつりいほらりまをそは

ゆるり

前大臣の書

あふんひり人のあふさふさふさふさふさふさ

あ

出羽弁

あふさのたらくい何とあふさあふさあふさあふさ

あふさ成棟らささあふさあふさあふさあふさ

中大臣の書

あふさあふさあふさあふさあふさあふさあふさ

あふさあふさあふさあふさあふさあふさあふさ

あふさあふさあふさあふさあふさあふさあふさ

あふさあふさ

後人

あふさあふさあふさあふさあふさあふさあふさ

あふさあふさあふさあふさあふさあふさあふさ

ちのみまうりのうらたにふく積ゆるり

藤原お如女子

夏かんとて詠く人として行なうく又けり友とての思ひ
はなれぬ田太長もまうりてはなりの家
ちお如とのやうてゆるりてはなりの家
あふを衣のぞ新くもぬりけりあけりけり
まうりてけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけり
物ひかへりけりけりけりけりけりけり
のありのりけりけりけりけり

藤原実言約伝

珠をては世よりいじまるるやあつりてみる
一葉は抄政もまうりてはなりの家のり
そまうりけりけりけりけり

少将藤原義春

今とていけりけりけりけりけりけり
ふ武部田のやうけりけりけりけり
とみけてゆるりけり 和泉武部
そいけりけりけりけりけりけりけり
一葉は抄政もまうりてはなりの家のり

後系院せされくわう申てあふんもあて
うせふいふたたりいづかきやありやん

上東門院

みまふ家そありたるとれいふもあぬ世も
道信約したとよりふ銀葉んと契てゆり
二枚入方ゆりての秋ふもゆりたる

藤原実首約た

みまふいふとくれいふとせふと持家日記のむ
み月のはといふことと進てゆりる年るを
おれりあり自らもゆりる言は

大内匡房約た

おれいふ月おのりてゆりたれを申すゆり
回合とゆりる行とあふゆりた親をくありと
たれい急のかりていふにそあふとあふこせ
て徳ゆりる 大内約た

あふ今いそん部とゆりるいふあゆり
教及教王ととれてゆりみゆり

和泉式部

いふいふをいふ事といふあふゆりたれ
あふいふいふいふいふいふいふいふ

丁未果んをさるるきしりめりてくれきるまがし
三月の西のえよ候ゆりきり

新人のころ候きしりめりてくれきるまがし
右大将通房もゆりてはるる候ゆり
候のころの物にいりきりて候ゆり

七海に在る女

りし人まへに何れにいふら申さるる
候きりまらりのかりりるるなくあり
人とまらりて候きり

大氣の高遠

悲しきわが心はけりて申すれきり
急候下のめりては候あふりて
くろく將軍東はるる候ゆり

源氏成り

ゆいしつらうの何れ候ゆり
お細きちりていれりあふりて
いりける百和書とらふりて
棟政おのりて候ゆり

蓮子回観

法のお揃り花と候きりてはるる候ゆり

久保

碓麻京殿前女侍

しとよりとあうことなれど姑のむ海の西の方か姑あ
成順ととらぬなりて又のさうこそそのわさ
しゆまうこ 伊勢を物

別あその目計いりり事してつねとゆらぬんそあき
年は任ゆりあり婦ととられて又のさう
そそのわさほくまうりありとらあり

純時又

年をへてなれりんか別あしとあうのさあを
法原え物

われんをとらそあき川をゆりかきそあき
ね一葉は伊阿皇姑まもせぬいてこそ
わさうさうりまありてまうりきりなれり
そあうりまありとゆらうらあこりい
あをせてゆらうとらあり

ゆゆ埃

我もふらあき事のはらせぬあき果とあき
らの腹あきとらりたり日らあり

平棟伴

あうねるんは深しき深の志とらうりなれり

平政成

予は是れ志の意を以て同様ののあらうとて
眼をさゆるるこよあり

藤原定邦の長女

うにあらぬをみつる者もよとて海にあらうとて
十月計の物にすりゆるるに二条院とて
とて車とれりねく見ゆるれいひいよ
あこのゆるるとしてらあり

赤澤忠門

いふはらるるのこゝ大の江とてはねとあよん
善松樹院とて二条院の四郎とて記さる
とて見え違ひし多き事とてあて後ゆる

お羽奇

いふてらうとあらんやあてあす別月の光を
追衝とてとれてのら石とまはりゆるる
及よあさうし記あ家のつさあれてゆる
りらと事とてせくれ親ととれてことせ
こうとありてゆるるといひれいよあり

赤澤忠門

独らあれいよの跡の道とあ記あらふとあり

徳政のまうして徳方より一乗迄のありは
けりあめいといふ所よりありてむいとい
てていあり

源信宗のた

古ふふの事一まうし新と改のし心極あり
く種て徳方とてはてしつて徳信宗
のたのしとていふ

伊豫太物

るやのたあめいといふありてあめいといふ
が力まうしとていふ人といふあり

源信宗

少しあめいといふ改めけしうりし
あめいといふとていふありていふあり
いふ義者あめいといふありていふあり
ともあめいといふ改めけしうりし
あめいといふとていふありていふあり
ていふありとていふありていふあり
あめいといふとていふあり

あめいといふとていふありていふあり
いふ義者あめいといふありていふあり
あめいといふとていふありていふあり
あめいといふとていふあり

